国立国語研究所学術情報リポジトリ

接続助詞の語彙的な意味と文脈的な意味：クセニとノニの記述と分析を巡って

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): number of states of affairs, relations of states of affairs, lexical constraint, context, owner of evaluation 作成者: 渡部, 学, WATANABE, Manabu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002068

『日本語科学』10(2001年10月) 34-55　〔研究論文〕

接続助詞の語彙的な意味と文脈的な意味
——クセニ[1]とノニの記述と分析を巡って——

渡部　学
(シンガポール国立大学)

キーワード
接続に関わる事態数，接続に関わる事態の関係，語彙的制約，文脈，評価の判断主体

要　旨

本稿ではクセニとノニという日本語の二つの接続助詞を論じ，この二つの形式は接続に関わる事態数，接続に関わる事態の関係という観点からは区別できないが，クセニには「話し手が接続に関わる一連の事態の在り方を低く評価し，それを特定の人物ないしは対象の責任であると考えている」という語彙的制約があり，クセニとノニの振る舞いの差異はこの語彙的制約から生じたものであると考える。従って本稿ではこの二つの形式が（結果的に）似たような文脈と意味で使用される場合は，クセニはこの語彙的制約から，ノニは文脈からその意味がうまれて来たと考える事になる。

またクセニに本稿のような語彙的制約を想定するアプローチでは，必然的にその評価／判断主体が誰かという考察も必要になってくる。そこで第三節では物語り（フィクション）からの実例を基に，クセニの語彙的制約が一部解除される現象を論じる。それを本稿では日本文学の語り手に西欧近代文学の narrator とは異なるユニークな性格があるからであると主張する。

0．初めに

本稿では特定の形式の語彙的（意味的）な制約が，その形式の言語現象にどのような影響を与えるのかという関心から，日本語の接続助詞クセニ，ノニについて考えてみたい。具体的には本稿で扱うクセニとノニの形式は接続に関わる事態数，接続に関わる事態の関係という観点からは区別できないが，クセニには「話し手[2]が接続に関わる一連の事態の在り方を低く評価し，それを特定の人物ないしは対象の責任であると考えている」という語彙的制約があり，それがためにクセニとノニの振る舞いに差異が生じていると主張する。すなわちクセニとノニはその語彙的な制約の有無で区別されるという分析である。

この事は（結果的に）この二つの形式が似たような文脈と意味で使用される場合には，クセニの場合はこの語彙的制約から，ノニの場合は文脈からその意味がうまれて来たと主張する事になり，接続助詞には語彙的な意味と文脈的な意味があり，それらがクセニとノニの用法の一部で交錯していると考える事になる。

またクセニに本稿のような語彙的制約を想定するアプローチでは，必然的にその評価／判断主体が誰かという考察も必要になってくる。そこで第三節では物語り（フィクション）からの実例を基に，物語りという文脈の中では本稿で主張するクセニの語彙的制約が一部解除される現象を

論じる。

以下，第一節では，まずノニ・クセニを他の日本語の逆接の接続助詞ケドと比較・分析し，その上でクセニとノニの文法上の振る舞い方の異同を探る。この際の分析の道具立てとしては渡部2000aの枠組みを用いる。第二節ではクセニとノニの差異を説明するべく，本稿の分析を論じて行く。第三節では物語り（フィクション）の中のクセニの実例を検証する。第四節は本稿のまとめである。

1．ノニ・クセニの基本的性格とその問題点

本節では渡部2000aで提案された（逆接の）接続助詞の意味記述の道具立ての中で，まず逆接の代表的な接続助詞ケド・クセニ・ノニとの意味的異同を探る。そしてその上でそれらの接続助詞をケドとクセニ・ノニのグループに大別し（1.1），次にクセニとノニの差異をクセニに特殊とされる特徴の議論（cf. 今尾1994，渡部2000a）を下敷きに考察して行く（1.2）。従って，本節の主要な関心は果たして渡部2000aで提案されている枠組みでこれらの接続助詞の記述が十分にできるのか，もし問題があるとすればいかなる問題があるのかを探る事である。

1.1．逆接の接続助詞の意味

本稿で扱う逆接は大きく二つに分けられる（c.f. R. Lakoff 1971，渡部1995b）。この二つの逆接は前件からの推論を介するかどうかで区別され，前件からの推論を介さない逆接はR. Lakoff 1971ではcontrast，渡部1995bでは対比的逆接と呼ばれており，前件からの推論を介する逆接はそれぞれの研究でdenial of expectation，推論的逆接と呼ばれている。まず前者の例から見よう。

（1） 象は鼻が長いけど，キリンは首が長い。

この例では「象は鼻が長い」「キリンは首が長い」という二つの事態[3]が逆接の接続助詞ケドによって接続され，比較されている。つまりケドは，この二つの事態を話し手が対比しているという話し手の意図を示している。

一方後者の意味では実際に発話された前件と後件以外に，話し手が前提としている事態（前件から推論されうると話し手が信じている事態）が接続に関与している。

（2） 男は殺人を犯したけど，まだ逮捕されていない。

この例では「男が殺人を犯した」「その男はまだ逮捕されていない」という発話された事態以外に「殺人を犯した男は（やがて）逮捕される」という話し手が前提としている事態が関与している。そして話し手はこの前提・推論と後件の事態との食い違いを示すためにケドを使用している。

本論の研究対象である接続助詞ノニ・クセニをこの点から比べてみると，両者とも後者の意味では問題ないものの，前者の意味では不自然な事が分かる。

（3） 象は鼻が長い（?のに／?くせに），キリンは首が長い。

（4） 男は殺人を犯した（のに／くせに），まだ逮捕されていない。

もし（3）でノニ・クセニの使用が妥当だとすると，その解釈は象の鼻とキリンの首に遺伝的・生物学的な因果関係を認める読みになってしまうように思われる。つまり「象は鼻が長い」「キリ

ンの鼻も同様の進化をする可能性があった」「キリンは首が長い」という三つの事態が関わっているとする読みである。するとこの読みは（1）の読みと等価ではなくなり，ノニ，クセニにはcontrast（R. Lakoff 1971）や対比的逆接（渡部1995b）と呼ばれる用法がないと考える方が自然のように思われる。

ここでこれらの二つの逆接の意味を渡部2000aの枠組みに従って整理してみよう。

渡部2000aでは，これらの接続助詞の意味をi）接続に関わっている事態の数，ii）それぞれの事態間の関係[4]によって記述する事を目指している。ここでそれぞれの接続に関わる事態をP，Q，Rと記号化して書き表わす事にすると，上の第一の意味には二つの事態が関わっており，P（それに対して）Qとでもいうような関係で接続されていた。第二の意味では接続に関わる事態は三つであった。そしてそれぞれはP（従って）Q（と予想される）（それにも関わらず）Rとでもいうような関係で接続されている。

これをまとめると以下のようになる。

（5）　Pケド／*ノニ／*クセニ，（それに対して）Q

　　P（従って）Q（が予想される）ケド／ノニ／クセニ，R

　　（下線は言語化される事態）

第一の用法では接続に関わっている事態の数は二つであり，それらはともに言語化されている。第二の用法では三つの事態が接続に関わっているが，そのうち二つしか言語化されていない。言語化されていない事態は，事態Pから推論できると話し手が信じている事態である。

さらに渡部2000aではノニ／クセニ／ケドの差異は，「話し手にとっての事実」という概念でより一般的に説明できるとしている。ここでは「話し手にとっての事実」とは，話し手が談話の中で特定の事態を事実としてとらえているのか，そうではないのかを言語的に示す事，と簡単に定義しておこう[5]。

例えばノニ／クセニ／ケドが上の第二の意味（推論を介する逆接）をとり，後件が話し手の期待する事態を表す場合，ケドとノニ／クセニのグループに明白な差異が現れる（渡部1995c）。

（6）　時間がない（けど／*のに／*くせに）ゆっくり歩きましょう。

（7）　時間がない（けど／*のに／*くせに）ゆっくり歩きたい。

上の接続には「時間がない」「（従って）急ぐもの（と予想される）」「（それにも関わらず）話し手はゆっくり歩こうと表明している」の三つの事態が関与しているが，三つ目の事態R（「ゆっくり歩きましょう」とか「ゆっくり歩きたい」という後件で表現されている部分）は，話し手が成立を希望している事態であり，その発話の場においては事実と確定していない。むしろ話し手はこのような事態が現実に成立していないと考えるからこそ，このような発話をするのである。そして後件がこのような内容の事態を取る時，ケドでは接続可能であるが，ノニ，クセニでは不可能である事が分かる。

この結果は，先の（5）を次のように手直しする事でまとめられる。

（8）　P（従って）Q（が予想される）ケド，R

　　P（従って）Q（が予想される）ノニ／クセニ，R

（下線は言語化される事態。太字は話し手にとっての事実的な事態）

ケドの場合，Ｒには話し手が成立を期待する事態（故に現実には未確定の事態）が来る事ができる。それはＲに話し手にとっての事実的な事態が来るという制約がないと仮定すれば，結果を正しく予想できる。上ではその事を通常のＲの活字で示しておいた。

反対にノニ／クセニの場合，この接続は不可能であった。これはＲに話し手にとっての事実的な事態が来るという制約があると仮定すれば，正しい結果が予想できる。この事は太文字のＲで示している。

このような事態Ｒの事実性に関する仮定は，次のような文の文法性の違いも正しく予想してくれる。

（９） 昨日は自分が夕飯を作るって言った（?? けど／のに／くせに）[6]。

この例ではＰ：「聞き手が前日に夕飯を作る約束をした」Ｑ：「（従って）聞き手が夕飯を作る（と予想される）」Ｒ：「（それにも関わらず）聞き手は夕飯を作っていない」の三つの事態が関わっている。

ここで重要な事は三つ目の事態は実際には発話されていないが，話し手の現実の中ではすでに成立した事実であり，話し手はノニ／クセニを使ってその事をほのめかしているという事である。逆にノニ／クセニはその語彙的な特徴からその事を示す事ができるから，話し手はわざわざ事態Ｒを後件として言語化する必要がないと説明できる。

この接続はＲの発話がオプションという事で以下のようにまとめられる。

(10) *<u>Ｐ</u>（従って）Ｑ（と予想される）ケド，**Ｒ**

<u>Ｐ</u>（従って）Ｑ（と予想される）ノニ／クセニ，**Ｒ**

（下線は言語化される事態。太字は話し手にとっての事実的な事態）

最後にこの「話し手にとっての事実」に関する仮定は，後件が以下のように否定命令文の内容を取る場合も矛盾なく説明できる。後件が否定命令文の内容を取る時，ケドでの接続は以下のように不可能である（渡部 1995c）。

(11) 時間がない（*けど／のに／くせに）ゆっくり歩くな。

(12) 時間がない（*けど／のに／くせに）ゆっくり歩かないでくれ。

上の（11）と（12）の後件は，(6)，(7) の例とは逆に，すでに現実に起こってしまった事態を話し手が否定するような内容になっている。この読みでの接続に関わる事態は，Ｐ：「時間がない」Ｑ：「（従って）急ぐもの（と予想される）」Ｒ：「（それにも関わらず）聞き手はゆっくり歩いている」Ｓ：「（従って）話し手は聞き手にゆっくり歩かないようにと指示する」の四つと考える事ができる[7]。

この分析で重要な点は，三つ目の事態Ｒ：「聞き手がゆっくり歩いている」が（実際にはどうであれ）談話の中ではすでに事実として扱われている，という事だろう。少なくともそう考えなくては話し手がその事態を否定するような命令文を発する理由がない。従って話し手がＲを「話し手にとっての事実」として扱っているという先程のノニ／クセニに関する仮定はこの分析とも矛盾しない事が分かる。

この接続を以下にまとめる。

(13) *P（従って）Q（と予想される）ケド，R（従って）S（と指示する）

P（従って）Q（と予想される）ノニ／クセニ，R（従って）S[8]（と指示する）

（下線は言語化される事態。太字は話し手にとっての事実的な事態）

このような分析の最大の利点は，ケド／ノニ／クセニという非常に近似した意味を表す接続助詞の振る舞いの差異を，統一的な仕組み[9]で一般的に説明できる事である。従って上の一般化を見る限り，ケド／ノニ／クセニという日本語の逆接の接続助詞は，ケドとノニ／クセニの二グループに大別でき，その用法は一部でのみ重なっている事が分かる[10]。

本節のまとめとして，ここまで見てきた接続をそれぞれの接続助詞の形式ごとに整理して，以下にまとめてみる。

(14) Pケド，（それに対して）Q

P（従って）Q（と予想される）ケド，R

P（従って）Q（が予想される）ノニ，R

P（従って）Q（が予想される）ノニ，R

P（従って）Q（が予想される）ノニ，R（従って）S（と指示する）

P（従って）Q（が予想される）クセニ，R

P（従って）Q（が予想される）クセニ，R

P（従って）Q（が予想される）クセニ，R（従って）S（と指示する）

（下線は言語化される事態。太字は話し手にとっての事実的な事態）

すると次の関心は，上のまとめが予想してしまうように，ノニ／クセニの振る舞い方が本当に同一なのかどうかという事になろう。またもしそうでないならば，その差異は本稿の採用した説明の枠組みで説明できるだろうか。これらが以下の節での主要な関心になる。

1.2. ノニとクセニの差異

クセニには一部ノニと重ならない用例がある。これらの用例の特徴は大まかに以下の２点にまとめられる（今尾 1994，渡部 2000a）。

(15) 前件と後件の主語[11]は一致しなければならない（但し状況に拠っては，この主語制限が緩和される場合がある）。

(16) 話し手は後件の内容に対して否定的な評価をしている。

以下これらの二つの点について検討を加えながらクセニの特徴を探って行こう。

1.2.1. クセニの主語制限

クセニでは発話に主語が明示的に示されていない場合，前件と後件の主語が一致する読みが普通である。

(17)　さっきも間違ったくせに，また間違っちゃったね。

この例では，前件の主語が一人称の場合は後件の主語も一人称，前件の主語が二人称の場合は後件の主語も二人称，前件の主語が三人称なら後件の主語も三人称という読みが自然であろう。すなわち同一人物が「さっきは間違った」「(従って) 次は間違わない (と予想される)」「(それにも関わらず) また間違った」という読みである。

但し一人称を主語とした文は，通常，自分に対する低い評価を甘受し，相手の言葉を繰り返す文脈や自分の事をあたかも他人事のように扱う文脈が普通である。

(18)　「(あなたは) のろまなくせに，いつも仕事を始めるのが遅いんだから」

　　「ああ，そうだよ。俺はのろまなくせに，いつも仕事を始めるのが遅いんだよ」

(19)　「ああ俺は何て馬鹿なんだ。さっきも間違ったくせに，また同じ事を間違った」

従ってクセニは北条 1989 が指摘するように，第一義的には「第二者，第三者に対する表現主体の非難，なじりの気持ち (p.98)」を示すものではあろうが，妥当な文脈があれば第一人称を主語とした文も可能である事が分かる。

クセニのこの特徴を実験的に確かめるために，前件と後件の主語を作為的に違わせた次のような例を見てみよう (以下の例は渡部 2000a の例。カッコはそこでの例文番号)。

(20)　(あなたは) 先生にわざわざ教えてもらったくせに，(あなたは) 文句ばかり言う (65)。

(21)　*先生がせっかく教えて下さったくせに，(あなたは) 文句ばかり言う (66)。

(22)　(兄は) お金が余っているくせに，(兄は) 弟にぜんぜんあげない (67)。

(23)　*(兄は) お金が余っているくせに，(弟は) 兄からぜんぜん貰わない (68)。

(24)　(A国は) 食料が乏しいくせに，全然輸入しようとしない (69)。

(25)　*(A国は) 食料が乏しいくせに，(外国は) 全然輸出しようとしない (70)。

上の (20)，(22)，(24) の例では前件と後件の主語が一致しているが，(21)，(23)，(25) の例では異なっている。従ってこれらのデータを見る限り，クセニには一般に前件と後件の主語が一致しなければならないという特徴がある事が分かる。

因みにノニにはこのような特徴はない。上で不適切と判断された例はノニでは総て自然である。

(26)　先生がせっかく教えて下さった (のに／*くせに)，(あなたは) 文句ばかり言う。

(27)　(兄は) お金が余っている (のに／*くせに)，(弟は) 兄からぜんぜん貰わない。

(28)　(A国は) 食料が乏しい (のに／*くせに)，(外国は) 全然輸出しようとしない。

1.2.2. 前件と後件の主語の異なる例

但し上で見たクセニの主語に関する特徴にあてはまらない例も少なからず存在する。今尾1994は後件に対して話し手が非難めいた感情を持っている場合，主語が異なってもクセニの接続が可能になる例として次の例を指摘している[12]。

(29)　雨がたくさん降るくせに，水不足が続く。(今尾 1994，p. 102，注7)

あるいは前件が自然現象や客観状況，後件がそれに関わる人間といった場合にもクセニの接続が可能になる場合がある。

(30)　あんなに待ち望んだ雪がやっと降ったくせに，妻はちっとも嬉しそうじゃなかった。
(渡部 2000a (73))

(31)　事業部には秘書なんかいないくせに，部長は見栄を張って嘘を言っている。

(32)　実家には不動産があるくせに，なんでそれを売って借金を返済しないんだ。

(33)　自分の時計が壊れていたくせに，人のせいにしている。

(34)　宝くじの一等があたったくせに，今だにボロ家に住んでやがる。

上の例では確かに前件と後件の主語は異なっている。しかしこのような例文の意味を仔細に観察してみると，確かに前件と後件の主語は異なっているものの，意味的には後件の主語が前件の事態と無関係とは言えないようである。むしろ発話の関連性という観点からみれば前件と後件には高い関連性があり，前件の事態が後件の事態の状況的な文脈になっているとも言えそうである。

例えば上の (31) の例では，「部長が見栄を張って嘘を言っている」という事態は，「事業部に秘書がいない」という状況の下で鼻持ちならない見栄として話し手によって批判されているわけであるし，(34) では「今だにボロ家に住んでいる」という話し手の感慨は「宝くじの一等があたった」という事実があればこそであり，後件の人物と前件の事態が全く無関係であればこの感想自体が的外れである。

このような観察は1.2.1.で見たクセニの特徴が，統語的な理由[13]によるものではなく，他の理由によるものでないのかという可能性を示唆してくれる。従って問題は，一体いかなる理由に拠ってこのような現象が生じるのかという事になるが，これについては第二節で詳しく検討する。

1.2.3. クセニの意味的な特徴

最後にクセニの意味的な特徴として，クセニの後件に関する意味的な特徴を挙げておこう。クセニの後件には，話し手の否定的な内容のものが来る事が普通である（以下の例も渡部 2000a より）。

(35)　??お金持ちのくせに，佐々木さんって本当に回りの方に気配りをなさる方ね (60)。

(36)　お金持ちのくせに，佐々木さんって本当にけちね (62)。

比べてみると (35) は (36) に比べて通常の文脈では非常に落ち着かない。(35) が自然な発話として受け取られるためには，嫌味や皮肉等の特殊な文脈が必要であるように思われる。

ここで上の二つの例文の後件の内容について吟味してみよう。(35) で他人に気配りをする事は通常望ましい事である。一方けちというのはあまり望ましい事とは言えない。従ってクセニが後件の内容に対しての話し手の低い評価を含意すると仮定すれば，(35) では評価上のねじれが起こるので不自然であり，(36) ではこのような評価上のねじれが起こらないから自然であると説明できる事になる。

また話し手の低い評価とは，典型的には話し手の非難，ないしは難詰といったような感情に結びつきやすい。従って評価の対象は話し手が評価するにふさわしい対象である必要がある。

(37)　?やっと降ったくせに，(雨は) すぐやんでしまった。

(38)　(兄は) やっと勉強を始めたくせに，すぐやめてしまった。

上の例ではいずれも前件と後件の主語は一致しており，クセニの第一の特徴とは抵触していな

い。また後件も「(雨／兄の勉強が) 長続きしない」という事態であり，話し手が低い評価を下す対象としては，上で述べた特徴にも抵触しないはずである。

しかしそれにも関わらず二つの文には若干の適切さの差異が感じられるのは，人間である話し手が，自然現象である雨に対して低い評価を下すのは特殊な文脈がなければ一般に不自然であるから，とは説明できないであろうか[14]。

興味深い事に1.2.1.で述べた特徴と同様，クセニで不自然な接続は特別な文脈なしにノニで自然である。

(39) お金持ち（なのに／??のくせに），佐々木さんって本当に回りの方に気配りをなさる方ね。

(40) やっと降った（のに／??くせに），(雨は) 長続きしないね。

従って前件と後件の主語が異なり，かつ後件に対する話し手の低い評価という特徴も認められないという以下の例では，予想通りクセニは不適切であるが，ノニは自然である。

(41) 「寒かった（のに／??くせに），よく頑張ったね」(壁 p. 247)

但しクセニに感じられる低い評価は，必ずしも攻撃的な内容に向くだけとは限らない。以下はその例である。

(42) 「お茶熱かったんじゃないの？」

「ううん，全然。」

「フフフ。無理しちゃって。本当は熱かった（くせに／??のに）」

今尾 1994 もクセニの評価には「攻撃性が伴い，非難・難詰・軽蔑など程度が甚だしいものから，「揶揄・からかい」といった軽いものまで含まれる (p. 97)」と指摘しているが，実際 (42) の例には攻撃性は感じられず，聞き手をからかうような趣きが感じ取れる。面白い事にこの文脈ではノニは不自然である。

この例は，次の節で詳しく述べるように，クセニにまつわる低い評価をクセニの語彙的な特徴と考える根拠の一つになっている。すなわちクセニでは，話し手が対象に対する低い評価を語彙的に示すので，文脈によっては穏やかな態度のもの（からかい）から激しい態度のもの（難詰・非難）までを表す事ができるが，ノニにはこのような語彙的な含みがないのでその読みは文脈から生まれてくると考える事になる。

2．クセニの記述を目指して

本節では前節で見たようなクセニとノニの振る舞いの差異を，先行論文で提案されている主語制限のような統語的な制約ではなく，クセニの語彙的な制限によって見かけ上生じた現象であるという分析を示す。またこのクセニの制限は意味的な制限であるので，渡部 2000a の説明にも容易に組み込める事を示す。

2.1. クセニの統語的位置

先にも確認したようにクセニの主語に関する制限は絶対的なものではなかったが，これを統語的な観点（田窪 1987）から再検証してみよう。

田窪 1987はカラに統語（階層）的位置の異なる二つを認めている。

(43)　［ 彼が行ったから，彼女も行った ］のでしょう。（田窪 1987（35）p. 43）

(44)　彼が行ったから，［ 彼女も行った ］でしょう。（田窪 1987（33）p. 43）

田窪 1987 は前者のカラは統語階層上Ｂ類にあたり，後者のカラはＣ類にあたると考えている。そしてそれぞれのカラの統語位置の違いと平行に意味構造が異なり，前者ではデショウの判断の対象は前件と後件を合わせた「彼が行ったから，彼女も行った」という話し手の想定する因果関係を含んだ二つの事態なのに対し，後者は「彼女も行った」という単独の事態だけであると論じている。上の例からノにはそれぞれのカラの統語的，意味的な働きを明示する働き[15]があると考えられる。

クセニを用いた接続の場合，ノの入らない形は不自然[16]である。

(45)　田中さんは本格的なディナーにジーンズで出て大恥をかいてしまったらしいのですが，きっとドレスコードも何も全く知らないくせに，参加してしまったのでしょう。

(46)　*田中さんは本格的なディナーにジーンズで出て大恥をかいてしまったらしいのですが，きっとドレスコードも何も全く知らないくせに，参加してしまったでしょう。

同じ事が疑問文の焦点についても言える。

(47)　フランス語も何も全くできないくせに，いきなり留学してしまったのですか。

(48)　*フランス語も何も全くできないくせに，いきなり留学してしまいましたか。

前者は通常の疑問文の読みが可能であるが，後者にはこの読みはかなり不自然であると思われる。後者に可能な読みは「選択的対比の意味を強調したクイズ的な読みか，反語的な読み（田窪 1987，p. 43）」しかないように思われる。

従ってこれらのテストからはクセニがＣ類の要素ではない事が確かめられる。この事は更に従属節内でのモーダル要素の出現[17]からも確かめる事ができる。

(49)　*両親は背が低いらしいくせに，子供達は皆背が高いなあ。（渡部 2000a，(78)）

(50)　*両親は背が低いはずのくせに，子供達は皆背が高いなあ。（渡部 2000a，(79)）

一方クセニは，従属節にテンス／アスペクトの対立があり得る事から考えて[18]，Ａ類の接続助詞とも言えない。従ってクセニはＢ類に所属する接続助詞として，それぞれの節が独立した主語を持てる事になる。この事は本稿の先の観察の結果とも一致する。

2.2. クセニの語彙的な意味特性

それでは前節で見たクセニの特徴は，一体どう一般的に説明されるべきなのだろうか。本稿ではそれをクセニの語彙的な制約と考え，それを次の（51）のようにまとめる事にする。

(51)　<u>P</u>（従って）Q（と予想される）クセニ，<u>R</u>

<u>P</u>（従って）Q（と予想される）クセニ，R

<u>P</u>（従って）Q（と予想される）クセニ，R（従って）S（と指示する）

（下線は言語化される事態。太字は話し手にとっての事実的な事態[19]。

話し手は一連の事態に低い評価をし，それが特定の人物／対象の責任に帰すると考えている）

責任とは話し手がある事態群の成立が特定の人物／対象の意志や能力のコントロール下にあり，その人物／対象がその事態群の成立に，積極的であれ消極的であれ関与していると信じている事である。話し手はその上でその一連の事態への低い評価を表明し，その特定の人物／対象[20]はその評価を甘んじて受けるべきだとも考えている。従って，クセニとノニは接続に関わる事態の数，それらの事態相互の関係については同一であるが，クセニは上の制約から「非難・難詰・軽蔑（今尾 1994，p.97)」といった含みが語彙的に生み出され，ノニはノニと文脈との相関関係からそのような含みが生み出される事になる。

以下，具体的な例を見ながら考察を進めて行くが，前件と後件の主語という観点から次の三つのケースに分けて考えて行く。

2.2.1. 前件と後件の主語が一致する場合

前件と後件の主語が一致する時，最も自然な接続がクセニに観察できる事は先に見た。これは接続に関わる一連の事態の責任を最も合理的に特定の人物／対象に帰する事ができるから，と考えられる。

例えば先に見た（20）をこの観点から検証してみよう。

(20)（あなたは）先生にわざわざ教えてもらったくせに，（あなたは）文句ばかり言う。

(20) に関わっている事態は「あなたは先生にわざわざ教えてもらった」「(従って）あなたは先生に感謝する（と予想される)」「(それにも関わらず）あなたは（先生に）文句ばかり言っている」の三つである。

話し手はこの一連の事態の在り方をとても低く評価している。しかも「あなた」と呼ばれる人物はこの三つの事態に関わっていると話し手は考えている。つまりこのような一連の事態の成立を「あなた」と呼ばれる人物は自らの意志で阻む事ができたのにも関わらず阻んでいない。だから「あなた」は責任があるのである。

幾つかクセニの例を挙げる。

(52)　できもしないくせに，馬鹿言ってんじゃないよ。

(53)　野郎の親父が何にも分からないくせに，しゃしゃり出て来やがった。

このようにクセニの最も典型的な例は，特定の人物の行為・属性を低く評価し，かつその低い評価を当該の人物の責任として，その人物を非難したり攻撃したりするものが多い。本稿の説明ではこれはクセニの語彙的な意味から生まれる読みで，これがクセニの最も中心的な用法という事になる。

一方ノニの場合は，必ずしもクセニのような強硬で威圧的な態度である必要もないようである。文脈によっては，呆れ，驚きと言ったやや退いた態度・感情を表す事もできるように思う[21]。

(20)'（あなたは）先生にわざわざ教えてもらったのに，（あなたは）文句ばかり言う。

クセニとノニのこの違いが際立つのは，今尾 1994 の言うクセニの「揶揄・からかい（p. 97)」の用法である。

(42)'「本当は熱かったくせに（無理しちゃって)」

上の（42)’に関わっている事態は概ね次のようなものだろう。若干文脈を補って考えてみる。「聞き手が熱いスープをすすった」「(従って）熱くて顔を顰める（と予想される)」「(それにも関わらず）聞き手は（無理して）平然とした顔をしている」

この場合話し手の発話の眼目は，自分が聞き手の行為を低く評価している事を表明して，聞き手をからかう事である。逆に言って自分が相手をからかっている事を示すためには，(本心からではないにせよ）自分が相手の行為を低く評価してそれが聞き手の責任だと思っている事を聞き手に知らしめる必要がある。その上でこの評価が本心ではない事が文脈（例えば表情）から相手に伝わり「からかい」と理解される。

ノニにはこのような語彙的な制限がなかった。従って以下の接続からは（42)’のようなからかいの意図は感じられず，どちらかと言えば報告のような平板な響きがある。

(42)” ??「本当は熱かったのに（無理しちゃって)」

このように前件と後件の主語が一致する場合には，クセニのからかいの用法を除けば，ノニとクセニの差異は際立ちにくい。これはこの条件では，ノニにも文脈的に非難や攻撃的な意味を補いやすいからではないかと考えられる。

2.2.2. 前件と後件の事態に状況的な関連が認められる場合

クセニには前件と後件の主語が一致しなくとも，前件と後件に状況的な関連があれば接続が可能になる場合があった。例を繰り返そう。

(31)事業部には秘書なんかいないくせに，部長は見栄を張って嘘を言っている。

(31）に関わる事態は概ね「事業部に秘書は配属されていない」「(従って）代表者は秘書がいるような発言はしない（と予想される)」「(それにも関わらず）事業部長は秘書がいるような嘘を言っている」のようにまとめられるであろう。この中で一つ目と二つ目の事態は論理的には部長の人格とは無関係に存在しえる。しかしここではクセニによって接続されているという事で，話し手がこの部長に一連の事態に対しての責任を認めており，その上で部長に対して低い評価を下している事が示されている。逆に言ってこの一連の事態を話し手の低い評価対象として部長に結び付けているのは，話し手の意図という事になる。

ノニも上の三つの事態の接続をする事ができるが，もし話し手の低い評価を感じるとすれば，これも上の場合同様，理論上は文脈からという事になる。

(31)’事業部には秘書なんかいないのに，部長は見栄を張って嘘を言っている。

クセニの例を幾つか示しておく。

(54)　立派な辞書があるくせに，あの人の手紙は誤字だらけだ。

(55)　政府は立派なお題目を唱えるくせに，現場の状況はお寒いばかりだ。

上のような例では評価を下され責任を追求されているのは，人間や人間の機関なのでクセニの使用は妥当なように思われる。しかしこのようなクセニの例で特筆すべき点は，日本語では自然現象にまで話し手が評価を表出できる点ではなかろうか。一部例を繰り返す。

(29)雨がたくさん降るくせに，水不足が続く。(今尾 1994，p. 102，注7)

(56)　祈祷師が散々祈ったくせに，（雨は）一滴も降りやがらねえ。

本稿の立場では上の例は，自然現象あるいは人間と天候の関係までを話し手が評価し，責任を追求していると解釈する事になる。

2.2.3．前件と後件の主語も一致せず，前件と後件の事態に状況的な関連もない場合

最後に一連の事態が独立した異なった主体によって引き起こされる場合，クセニでの接続が不可能になる事を示そう。これは異なった行為主体が関わった一連の事態には，話し手がその責任を特定の人物／対象に帰する事が不可能だからと説明する事になる。例を繰り返す。

(21) *先生がせっかく教えて下さったくせに，（あなたは）文句ばかり言う。

(25) *（A国は）食料が乏しいくせに，（外国は）全然輸出しようとしない。

(21) に関わる事態は概略「先生がわざわざ教えて下さった」「（従って）聞き手が感謝する（と予想される）」「（それにも関わらず）聞き手は先生に文句を言っている」というものであろう。ここまではノニとクセニの接続的意味の枠組みには一見どちらもあてはまっているように見える。

しかしそれにも関わらずこの例でクセニでの接続が不自然なのは，「文句を言う」という後件の行為は聞き手の行為であり，話し手が聞き手の責任を追求する事ができるのに対し，「先生がわざわざ教えて下さった」という行為は先生の行為であり，それまで含めて聞き手の責任を責めるわけにはいかないから，とは説明できないだろうか。つまり話し手はこの一連の事態の責任を聞き手にすべて負わせるわけにはいかないのである。

(25) の場合も同様の説明ができる。話し手は「外国が食料を輸出しない」態度を低く評価し非難する事はできる。しかし「A国は食料が乏しい」「（従って）A国が外国に食料援助を求める（と予想される）」事まで併せて外国の責任にする事は出来ない。それはA国の責任であり，外国がその批判を甘んじて受ける性質のものではないからである。従ってこの例が不自然なのは，一連の事態全体を外国の責任として非難する事が不適当だから，という事になる。

これらの事態の接続はノニでは全く問題がない。従ってこれらの用例でノニ，クセニが際立った違いを示すのは，本稿の立場ではクセニの語彙的な制約のせいとまとめられる事になる。

3．物語りの中のクセニと語り手

最後に本節では視点を少し変え，日本語の物語り（fiction）に本稿のクセニの分析があてはまるかどうかを見てみよう。

本稿ではクセニに「話し手が接続に関わる一連の事態の在り方を低く評価し，それを特定の人物ないしは対象の責任であると考えている」という語彙的な制約を主張した。ここで話し手とは独立した精神と肉体を持ち，情報や感情を伝えたり聞き手に行為を起こさせる言語活動の主体の事であった。

考えるまでもない事だが，物語りの中にはこのような生身の存在は存在しない。従って物語りの中ではクセニが全く使われないか，仮に使われても本稿の分析がそのままでは適応できないのではないかという予想が立てられる。

結論から先に言えば，日本語の物語りにはクセニが使用され，その用法には一部制限がある。本稿ではこれを日本語の語り手のユニークな性格のため，と説明したいと思う。

以下，3.1.では物語りというジャンルの特徴を簡単に概観し，3.2.で物語りの中でのクセニの特徴，そして3.3.で日本語の語り手と西欧近代文学理論[22]で言う narrator という概念との差異を中心に検討していく。

3.1. 日本語の物語り文の特徴

日本語では単語や表現の用法が談話のジャンルによって異なると説明される事が多い。例えば，日本語の感情を表す形容詞ホシイには通常の対話という文脈では以下のような使い分けが見られる。

(57) 僕は水が欲しいなあ。

(58) *?太郎は水が欲しいよ。

ホシイという形容詞は私という一人称主語と一緒に使われるには何の問題もないが，太郎という三人称主語との共起は不自然である。話し手が三人称の主語を用いて，聞き手にその人物の状況を報告しようとしている場合，次のような形を取るのが普通であろう。

(59) 太郎は水を欲しがっているよ。

上の現象は，ホシイという語は一人称主語と，ホシガッテイルという語は三人称主語と共起するという選択制限があるとまとめる事ができる。そしてこれは話し手が第三者の願望を伝える時にはホシイという形式ではなく，他者の心理状況を間接的に報告するホシガッテイルという形式を使うのだと説明できよう。これは上の形容詞がタ形を取った時も同様である。

(60) *?太郎は水が欲しかったよ。

(61) 太郎は水を欲しがっていたよ。

しかし次のような例を見ると，上で見た主語と述語の選択制限が物語りという文脈の中では必ずしも適応されていない事が分かる。

(62) 太郎はもう敵の事などどうでもいいから水が欲しい。炎天下の道を散々歩いて来て，もう喉がからからなのだ。

(63) 太郎は水が欲しかった。炎天下の道を散々歩いて来て，もう喉がからからなのだ。

金水 1989 ではこの現象を，日本語では一般に「直接知ったこと，または話し手が直接決定できることと，そうでないことを文の形式の上で区別しなければならない（p. 123（11））」のであるが，「「語り」においては，（11）の制限の一部またはすべてが無化される（p. 124（12））」と説明している。つまり物語りの中では語り手が自由に作中人物の心の中にも入って行けるのだから，通常は直接窺い知る事のできない第三者の感情に関する制限も適用されなくなるのだ，と言うのである。

3.2. 物語りの中のクセニ[23]

本稿で観察して来たクセニにも，物語りの中では通常の対話の文とは異なる性格が観察される。

(64) 無為に，本当の意味でなにもせずに五十年も生きてきたくせに，いいことなどなにもなかっ

た人生の最後にそれくらいの恩恵があってもいいのではないかと思えてくるのだった。(蔭 p. 1370)

(65) 着替え着替えと騒いだくせに，ヒカルはトランクス一枚になるとなにも纏わなかった。(夏 p. 1429)

(66) 長長とむかしの話を聞かせたくせに，金橋は肝心の小此木慶三郎の左遷については，何も記憶していなかった。(三 p. 1337)

(67) (略) 下戸の近藤は，平素飲みつけぬくせに，杯を三ばいまであけて，真赤になっていた。(燃上 p. 1382)

(68) 自分自身が独占企業に勤めているくせに，悦夫はホテルの悪口をあれこれ言い続けた。(ヴ p. 1252)

これらの用例の特徴はその後件にある。先に見た通常の対話文では後件から特定の人物に対する非難，攻撃，からかいといったような感情が容易に読み取れたが，上の用例の後件（「思えてくるのだった」「纏わなかった」「何も記憶していなかった」「真赤になっていた」「言い続けた」）では語り手の感情が表されているというよりは，客観的な語りの口調になっている。

この特徴は物語りの中の他の種類の文と比べて見れば分かりやすい。

(69) 『おのれは，おれと同様。法義もわからぬくせに，なにをこくか』(雑賀 p. 113)

(70) 『はーあ，毎日ああやって小言だよ。な〜〜んにもわかってないくせに。』(モ p. 198)

(71) 『姉さんは取り越し苦労ばかりしているくせに，ちょっとも理屈にあわない』(燃下 p. 1319)

(72) (このいそがしいのに……いや，いそがしいことを知っているくせに，昨日も今日も出歩くというのは……二月前までのお富には，そんなことはなかったばかりか，外出はきらいだといっていたくせに……) (鬼 p. 199)

(73) でも，たぶんヒカルだって，人を差別したり見下したり笑ったりなんてしょっちゅうしているくせに。(夏p. 1414)

上の (69)〜(71) の文は登場人物のセリフ，(72) (73) の例は登場人物の心理描写からの例であるが，これらの例では特定の登場人物の感情（非難・からかい等）が容易に読み取れる。

従って，先に本稿ではクセニとノニの差異を説明する方法として，クセニに「話し手が接続に関わる一連の事態の在り方を低く評価し，それを特定の人物ないしは対象の責任であると考えている」という語彙的な制約を主張したが，上の (64)〜(68) の例ではこの制約が十全に働いていない事が分かる。本稿ではこれを制約の（一部）解除という言葉で呼ぶ事にしよう。

3.3. 制約の解除と物語りの語り手

上の現象は，一見，先に3.1.で観察した日本語の一般的な特徴にもよくあてはまっているように見える。つまり通常の対話の中では観察されるある種の制約が，物語りの中では「無化」ないしは解除されているという現象である。

しかし3.1.ではその理由を，物語りの中では語り手が自由に作中人物の心の中に入って行けるからと考えたが，このクセニにはこの説明はあてはまりにくい。上で見た例は，語り手が特定の

人物の心理描写をしている場面ではなく，物語りの筋を追っている部分だからである。しかしその一方で上のクセニにも（特に前件の部分には）ある種の感情的な響きさえ感じ取れる。

そこで本稿ではこのクセニに，作者が語り手の口を借りて自らの感情を吐露している部分，という分析を主張しようと思う。つまり「一連の事態の在り方を低く評価し」それに対する感情を吐露しているのは作者であり，その声を代弁[24]しているのは語り手である。しかし語り手には物語りを語るという公的な役割があり，語り手が表立って特定の登場人物に向かって非難，からかいの情を示す事は妥当でない。従ってこの二つの相反する文学上の要請に折り合いをつけるため，クセニの制約が一部適応されずに解除されているという分析である。

この分析は日本語の近代小説の語り手の視点について望月・熊倉 1987 が述べている事と相通じるものがあるように思われる。望月・熊倉 1987 は「(略) 西欧の近代文学が，語り手又は作家の声を沈黙させる方向に向かったのに対して，日本の近代文学はその客観化の意図にもかかわらず，作家の声を消すどころか響かせようとする（略）(p. 71)」と述べているが，もし本稿のクセニの分析が正しければ，このクセニは作者が語り手を通じて自分の声を響かせる文学的な装置である事になる。

もちろん日本語の語り手も登場人物の心の中に自由に入って行ける等，物語りの中で narrator が果たす役割と似た機能を担っている。しかし上で述べた理由から日本語の語り手は作者とは完全に切れた存在[25]ではなく，作者の半ば fictional な，半ば血の繋がった分身であると考えるのが妥当ではないだろうか。日本語の語り手は「「全知」或いは「第三人称」の視点（望月・熊倉 1987, p. 70)」を持つとされる西洋近代文学の narrator とは，この点で異なっているように思われる。

但し次の例のように語り手が実在する作者[26]について言及する場面では，地の文の中でも後件に非難，難詰といった感情が表出される事はありえる。例を一つだけ上げる。

(73) 私には，ささやかな迷信があるらしく，心のどこかで年齢の時計が狂っている。たとえば自分だけが，齢をとっていないのではあるまいか。

代議士や市会議員になるひとは，自分よりはるかにおじさんだと思いこんでいるくせに，ある日，だしぬけに，首相が自分とほぼ同年であるという悲惨な現実を知ったりする。（明 p. 299）

この例では語り手が生身の人間である作者に対してその評価を表明し，感情を吐露しているので，クセニの語彙的な制約が十全に生かされていると考えられる。

4．本稿のまとめと残された課題

本稿での分析と主張の要点は以下の３点にまとめられる。

1 ノニ，クセニは，接続に関わる事態の数，関係という観点からは区別できない。

2 しかしクセニには接続に関わる事態全体に対する語彙的な意味制約があり，その制約の有無でノニとの振る舞いの差異が説明される。

3 クセニの語彙的な制約は物語りの中で一部解除される事がある。

本稿の残された課題としては，本稿で主張した分析方法が他の形式を分析するのに有用である

のか，また本稿で主張した話し手の評価という概念が日本語（あるいは言語一般）においてもどのくらい有用な概念であるのか等を探っていく必要があろうと思っている。

前者の課題を確かめるのは比較的簡単であろう。色々な接続形式をこの枠組みで分析して，その結果を集めて見れば良いからである。但し，本稿では敢て中心課題として取り上げなかったが，枠組み（理論）のより良い形式化（記号化）という課題はいつでも存在する。歴史的に見ても統語論や音韻論の議論が飛躍的に進んだのには，形式化（記号化）の洗練を伴っていた。この意味でより良い形式化（記号化）には，記述方法の洗練以上の実質的意味が伴う場合もある。そしてその記述方法で他の言語現象の理解も進められるのであれば，枠組みの理論上の進歩も得られると思う。

後者の課題に関して言えば，本稿で見たような概念がこの語彙だけに特殊なものなのか，それとももっと一般的な現象の一部なのかは現時点では不明である。この点についても本稿で扱った形式以外の形式についても同様の視点からの継続的な研究が必要であろう。

また本稿で扱った現象は最終的には意味と他の言語現象の関連という非常に大きな問題を考える事になろうかと思っている。一般には意味的な特徴が他の言語現象（例えば主語の選択のような）にも何らかの影響を与える可能性は否定できない。しかし本稿で扱った現象がこの意味でどのような意味があるのかは現段階では不明であるからである。

最後に本稿のような（演繹的な）方法で研究を進めるにあたり，実例と作例をうまく併せて研究を進めて行く必要性を痛感している。実際，実例にあたってみると頭の中で考えていてはなかなか思い付かないような用例がいくつもあり，言語現象の多様性を窺わせた。

事実，筆者は初めクセニは小説の地の文には現れないと予想していた。確かにこれらの用例の頻出度はかなり低い。とはいえ言語学の目標が，言語現象の説明にある以上無視できるものではない。

この点で本稿が日本語の語り手のユニークな性格としか説明できなかった事象は，もう少し一般的な見地から検証すべき課題であろうと痛感している。すなわち日本語の語り手の性格がユニークだとするならば，一体どういう意味においてユニークなのであり，またそれは日本語の物語りのどのような一般的な特徴によっているのか，という課題である。そしてこの課題は他の言語形式の考察を通してもなされなくてはならないと思われる。

注

1　本稿ではクセニとクセシテを同一語彙の異形態として扱う。

2　話し手とは言語活動を通じて聞き手に情報や自己の感情を伝えたり，聞き手に行為を起こさせたりする生身の存在である。

3　本稿では，接続に関わる意味的な状況を事態と呼び，それらが言語化されて発話されたものを前件，後件という言葉で表す。

4　これらの事態間の関係は更に還元的（reductive）な語彙（例えば論理記号等）で記述できる可能性もある。但し本稿ではその議論が目的ではないので，簡単な日本語でパラフレーズして示す事にする。

5　本論ではこの概念自身にはこれ以上深入りできない。「話し手にとっての事実」という概念には非常に興味深い性格があり，渡部 2000b を日本言語学会第130回大会で口頭発表した時，大阪大学の金水敏先生には非常に核心に迫るコメントを頂いている。残念ながら本稿ではその時のコメントに言及する余裕はない。

6　ケドを使った場合，更に発話が続くという含みがあるが，ノニ／クセニを用いた場合はその含みはない。言い差しだけの表現で発話は完結している。

7　クセニをＢ類の要素，ケドをＣ類の要素と仮定すれば，以下のような統語／意味分析が得られる。

*[時間がないのに／くせに　ゆっくり歩く] ましょう
[時間がないのに／くせに　ゆっくり歩く] な
[時間がないけど]　[ゆっくり歩く] ましょう
*[時間がないけど]　[ゆっくり歩くな]

このような分析を採れば，なぜマショウとナで（統語的位置は同じなのに）振る舞いに差が出るのかを一般的な枠組みで説明する必要がある。本稿ではこの振る舞いの差異を話し手にとっての事実性という概念で説明した。また上の二つ目の例で，聞き手がすでにゆっくりと歩いている（と話し手が信じている）事は，本稿の分析では接続に関わる事態の一つであるが，上の分析では発話の語用論的な条件となろうかと思う。

8　ここで事態ＱとＳの内容が実は近似している事に注意されたい。話し手はノニとクセニを使った発話で，実は自分の価値観を二度も繰り返して表出しているのである。渡部 2000a ではこれが，ノニとクセニにまつわる感情的な含みの原因であると分析している。

9　一般的に言うと本稿で採用した分析方法は，いわばそれぞれの接続的意味のテンプレートを示す事である。これは音韻論や統語論の深層構造（シラブルストラクチャーやフレーズストラクチャー）に対応するものと考えて貰えれば良い。そしてその場合の表層構造とは実際に言語化された前件と後件である。本稿では表記の技術的な面に入り込むのは本意ではないので，簡便な表記法を採用している。

10　ケド／ノニ／クセニの用法が重なるのは，それらが推論的逆接を取り，Ｒが事実的な場合である。この最も典型的な例は，「時間はなかった（けど／のに／くせに），わざとゆっくりと歩いた」のようなものである。

11　これは厳密にはその文で述べたてられる人物／事象の事であるが，本稿では説明を簡単にする便宜上，主語という語を使って代用する事にする。従ってこの主語という概念は本稿では意味的な概念であり，諸派の統語理論がそれぞれ別々に定義するような統語的な概念ではない。本稿ではこの意味的な側面を強調するために「事態の主体」という言葉も使用する事がある。

12　この今尾1994の例は日本語話者でも判断が揺れるところであろう。筆者の判断ではあまり自然な接続とは思われない。おそらく文法性のかなり限界的な位置に位置する例であろう。筆者は実例ではこのような例は確認していない。

13　端的に言ってクセニが南(1974)や田窪(1987)の日本語の統語構造分析におけるＡ類に属する接続助詞なのか，Ｂ類に属する接続助詞なのか，という事である。

14　但し農家が日照りで苦しんでおり，天候の不順をのろうような文脈では自然な接続になると思われる。

15　このノの働きについては 野田1997 では「スコープの「の（だ）」は，その前の部分を名詞化するために用いられるものであり，「の」+「だ」という組成に近い機能を果たす（p. 58)」と述べてい

る。従って本稿の関心から言えば，ノによって「名詞化」される対象は前件と後件を含む一連の事態である。

16　いわゆる確認要求のデショウの場合，この接続は可能であるが，本稿では推量のデショウの場合はノが必要だと考える。但し本稿でも 安達1999 が述べているように，確認要求のデショウは「推量としての性質を保持しているものから，これを希薄化しているものまで連続的に捉えるべき（p. 31)」と考える。本稿の例でも発話の状況から話し手が（何も知らないくせに，あんな大それた事をしてしまった）と推論し，それを相手に確認している状況も考えられるからである。従って本稿での例文の判断は，聞き手に同意を求めない発話現場での話し手の純粋な推量を表すもので，その文脈の時にはノが必要であるという事になる。

17　とはいえ，渡部 2000b の中で検討しているように，ノニ・クセニ節の中のモーダル形式の出現はその形式の意味的な特徴にも左右されるようである。

*今にも電車が出発するらしいのに，太郎はまだ来ていない。(40)

随分とお金を貯めこんでいるらしいのに，太郎は本当にけちだ。(43)

随分とお金を貯めこんだらしいのに，太郎は本当にけちだ。(46)

一般に前件の事態が状態的な時，ラシイがノニの前に起こりうるようである。このような問題については改めて別稿で議論する予定である。

18　例えば，「何も知ら（ない／なかった）くせに，そんな大それた事をしてしまったのですか」。

19　ここでクセニの後件の内容に関しての事実性の制約を，クセニの持つ「評価」という特性から導き出す事も可能のように思われる。つまり評価を下す事ができるのは現実に成立していることがらに対してである，といったような一般的な制約を想定し，そこからクセニの後件の制限を導き出す方法である。しかしそうすると，そのような「評価」を想定していないノニに関しては，全く別の理由からクセニと同じような制約を導き出すか，あるいは全く独立した制約として仮定する事になる。本稿は後件の事実性に関する制約はノニとクセニに共通，そしてクセニはその上に独自の語彙的制約がある，という立場に立っている。

20　今尾1994もクセニの用法に制限をつけるという方向性では，本稿の立場と通じる部分があるように思われる。

「ノニ」：期待に反する事柄に対する話者の気持（意外感・遺憾など）を表す。

「クセニ」：期待に反する行為及びその行為者に対する話者の攻撃的評価（非難・難詰・軽蔑・揶揄など）を表す。

(今尾 1994，p. 97)

この今尾 1994 の立場は，ノニは「事柄」，クセニは「行為及び行為者」に対する「話者の気持」としてまとめる事もできるように思われる。

21　但しこの違いは微妙であり，この例ではあまり際立った違いにはならないかも知れない。

22　西欧近代文学と言っても，本稿では特に近代英文学の伝統を念頭においている。また本節の理解は1996春学期にハワイ大学大学院で行われたLING 642: Discourse Grammar（Prof. Roderick Jacobs）のゼミでの議論を基にしている。

23　本論で引用した実例は筆者が印刷された媒体から拾ったもので，電子化されたコーパスは使用していない。従って統計的な裏付けはないが，ここまでの結果ではクセニの使用頻度はノニに比べてかなり低い。将来的には電子化されたコーパスを用いた数量的な裏付けも必要であろうと認識している。

24　このように作者が自分の判断を物語りの中に滑り込ませる事は日本語の文学作品の場合，決し

て少なくないように思われる。例えば，デアロウというモダリティー形式の場合，語り手が物語りの中に降り立って自らの判断を示す次のような用法がある。

- お雪は，内心おどろいている。新選組の土方歳三といえば，天下のたれもが，こういうときにこういう声音を出す男だとは知らないであろう。(燃下 p. 1198)

ラシイにも同様の物語りの語り手の判断を示す次のような用法がある。

- 「華やかでしょうか」
  「ですよ」
  歳三は，いった。
  「この世でもっとも華やかなものでしょう。もし華やかでなければ，華やかたらしむべきものだ」
  歳三は別のことをいっているらしい。(燃下 p. 1197)

これらの現象を本論の興味に引き付けて言えば，クセニが地の文の中に出て来た場合，それは作者の評価と考えて良いのではないだろうか。因みにノニには作者の物語りへの強い介入性は感じられない。

- 今年は空梅雨だといわれたほど晴天が多かったのに，梅雨あけも近くなって，毎日毎日，じめじめと降りつづけた。(鬼２ p. 126-7)

25　例えば narrative に関する最新の理論の一つである Zubin and Hewitt (1995) の中でも author と narrator という言葉は注意深く使い分けられている。authorは「If an author wishes to present events as simply and straigtforwardly as possible, he or she will strive to make the perspectivalization as unobtrusive and objective as possible (略) (pp. 132-3)」という生身の努力できる存在であるが，narratorは「The narrator controls not only what is looked at, but from what perspective these things are viewed (p. 131)」という純粋に文学上の機能である。つまり narrative の中では narrator も author の fictional な創作であり，その fictional な narrator がnarrative を語るのである。

26　但しこの作者の場合，エッセイとフィクションの境目が作品によっては不鮮明になりがちである。例えば『坂の上の雲』という作品では日露戦争の過程が刻々と語られるが，読者にはどこまでが事実でどこまでが作者のfictionなのかが非常に分かりにくい。またこの小説の語り手はしばしば読者に直接語り掛けて来る。

参考文献

安達 太郎 (1999)『日本語疑問文における判断の諸相　日本語研究叢書１１』くろしお出版

Anscombre, J. et O. Ducrot (1977) Deux mais en français?. *Lingua* 43. 23-40

————(1978) Lois logiques et lois argumentatives. *Français Moderne* 46. 347-357

————(1979) Lois logiques et lois argumentatives. *Français Moderne* 47. 35-52

Blakemore, D. (1987) *Semantic Constraints on Relevance.* Basil Blackwell

————(1988) Denial and Contrast: A Relevance Theoretic Analysis of *But. Linguistics and Psychology.* 15-37

Bruxelles, S., O.Ducrot, E.Fouquier, J. Gouaze, G.dos Reis Nunes et Remis. (1976) Mais occupe-toi d'Amelie. *Actes de la recherche en sciences sociales* 6. 47-62

今尾 ゆき子 (1994)「ガ／ケレド／ノニ／クセニ／テモ―談話語用論からの考察―」『日本語学』８月号，92-103，明治書院

北条 淳子 (1989)「複文文型」『日本語教育指導参考書１５　談話の研究と教育 II』7-111，国立国語

研究所
金水 敏 (1989)「報告についての覚書」仁田・益岡編『日本語のモダリテイ』121-129, くろしお出版
小泉 保 (1987)「譲歩文について」『言語研究』91, 1-14
Lakoff, Robin (1971) If's, And's, and But's about Conjunction. *Studies in Linguistic Semantics.* 214-49. Holt, rinehart and Winston, Inc.
前田 直子 (1994)「テモ／タッテ／トコロデ／トコロガ」『日本語学』８月号, 104-113, 明治書院
———— (1995)「ケレドモ・ガとノニとテモ」『日本語類義表現の文法（下)』496-505, くろしお出版
南 不二男 (1974)『現代日本語の構造』大修館書店
宮地 裕 (1983)「二文の順接・逆接」『日本語学』12月号, 22-29, 明治書院
宮島 達夫・仁田 義雄編 (1995)『日本語類義表現の文法（上, 下)』くろしお出版
望月 奈良江・熊倉 千之 (1987)「日本の近代小説に於ける語り手の視点」『日本語学』11月号, 70-82, 明治書院
森田 良行 (1980)『基礎日本語２』角川書店
———— (1987)「文の接続と接続語」『日本語学』９月号, 28-36, 明治書院
西原 鈴子 (1985)「逆接的接続における三つのパターン」『日本語教育５６』28-38
仁田 義雄 (1991)『日本語のモダリティーと人称』ひつじ書房
野田(小金丸) 春美 (1990)「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」『日本語学』３月号72-82, 明治書院
———— (1993)「「のだ」と終助詞「の」の境界をめぐって」『日本語学』10月号, 43-50明治書院
———— (1997)『「の（だ)」の機能　日本語研究叢書９』くろしお出版
佐治 圭三 (1970)「接続詞の分類」『月刊文法』2巻12号, 28-39
佐竹 久仁子 (1986)「『逆接』の接続詞の意味と用法」『論集日本語研究（１）現代編』162-185, 明治書院
Takubo, Yukinori (1985) On the scope of negation and question in Japanese. *Papers in Japanese Linguistics* 10. 87-115
田窪 行則 (1987)「統語構造と文脈情報」『日本語学』５月号, 37-48, 明治書院
寺村 秀夫 (1982)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版
———— (1982)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版
———— (1991)『日本語のシンタクスと意味 III』くろしお出版
渡部 学 (1990)「２文の因果関係と接続」『日本学報』5, 1-67, 大阪大学
———— (1995a)「形式名詞と格助詞の相関―単文と複文をめぐって―」『複文の研究』27-54, くろしお出版
———— (1995b)「ケレドモ類とシカシ類　日本語の逆接表現１」『日本語類義表現の文法（下)』593-599, くろしお出版
———— (1995c)「ケド類とノニ　日本語の逆接表現２」『日本語類義表現の文法（下)』557-564, くろしお出版
———— (1998) A mental space analysis of the speaker's linguistic reality. Ph.D. diss. Univ. of Hawaii
———— (2000a)「逆接表現の記述と体系　ケド, ワリニ, ノニ, クセニをめぐって」『現代日本語研

究』7，113-134，大阪大学
――― (2000b) 話し手にとっての事実，日常生活の中の事実（口頭発表）6月17日・18日，日本言語学会第120回大会，於千葉大学
Zubin, David A., and Lynne E. Hewitt (1995) The Deictic Center: A theory of deixis in narrative. In Duchan, J.F., G.A.Bruder, and L.E.Hewitt eds. *Deixis in Narrative.* Laurence Erlbawn Associates, Inc.

用例の出典（出現順）

(壁)「壁ぎわ税務官」佐藤智一『ビッグコミックオリジナル2000.1.20.』小学館
(雑賀)「雑賀の舟鉄砲」司馬遼太郎『軍師二人』講談社文庫
(モ)『モンスター第八巻』浦沢直樹，小学館
(燃上，下)『燃えよ剣（上／下)』司馬遼太郎，新潮文庫
(鬼)『鬼平犯科帳２』池波正太郎，文春文庫
(夏)「夏の約束」藤野千秋『文藝春秋三月特別号2000』文藝春秋
(蔭)「蔭の棲みか」玄月『文藝春秋三月特別号2000』文藝春秋
(三)『三屋清左衛門残日録』藤沢周平，文春文庫
(ヴ)『ヴィーナスのえくぼ』加賀乙彦，中公文庫
(明)『「明治」という国家』司馬遼太郎，日本放送出版協会

（投稿受理日：2000年８月14日）
（改稿受理日：2001年１月10日）

渡部　学（わたなべ　まなぶ）
Department of Japanese Studies, Faculty of Arts and Social Sciences
National University of Singapore
Blk AS4, 9 Arts Link
Singapore 117570
jpsmw@nus.edu.sg

Japanese Linguistics 10 (October, 2001) 34-55 〔Article〕

Conventional and contextual meaning of the Japanese subordinate conjunctions *kuseni* and *noni*

WATANABE Manabu
National University of Singapore

Keywords
number of states of affairs, relations of states of affairs, lexical constraint, context, owner of evaluation

Abstract

In this study, I discuss a pair of Japanese conjunctions *kuseni* and *noni,* and argue that, although the two conjunctions involve the same number of states of affairs and exhibit the same semantic relations between them, they behave differently because of a lexical constraint associated with the conjunction *kuseni.* I claim that the conjunction *kuseni* lexically implies the speaker's low evaluation toward the states of affairs involved, and that the speaker believes his/her low evaluation can be attributed to a particular person or object. Thus, while the two conjunctions seem to express similar semantics (such as blame, criticism, or denouncement), the readings are lexical in the case of *kuseni,* and contextual in the case of *noni.*

The above analysis of *kuseni* raises a very interesting theoretical question, because it inevitably assumes an owner of evaluation. When the conjunction is used in a dialogue, the owner of evaluation is clearly the speaker. When the conjunction is used in fiction, however, the owner could be the narrator, the antagonist, or the author.

The conjunction *kuseni* is found in the narrator's narrative prose, although the occurrence rate is not very high. This fact seems to suggest that the author's evaluation can be expressed subtly but linguistically through the narrator's voice in literature, and if this analysis is right, this convention seems to be a very interesting characteristic of Japanese narrative.